

高崎経済大学に学んだのは、昭和四十二年四月から四十六年三月の四年間。私の人生の中で、これほど魅力的に輝いた時期は、この四年間において他はない。もっとも些か危なっかしい時期でもあったのだが、その危険な部分ほど楽しく思いう出深い記憶が残っているものなのだ。

当時の「ケイダイの学生さん」は等しく貧乏学生であり、私はそんな理由から学食のお世話になる。二食つきで月額四千五百円也、非常に助かった。しかし少し裕福な学生でも、農家の蚕小屋をベニヤ板で仕切っただけの下宿部屋が多く、ワンルームマンションを棲み家とする現在の学生さんとは隔世の感がある。四十五年以上も前の話だから無理もない。

「憧れの」と表現した柳川町の存在は、入学当初より知っていた。在学中に都合四回だけ「厄介になつたが、そのひとつひとつの記憶はあまりにも強烈である。

初めての柳川町は新入生コンパとかで、徳島出身者が集う楽しい行事の筈であつたが、私には面白くない出会いとなつた。すなわち歓迎コンパは、安い料理屋の二階で酒を浴びるほど飲まされて、早々に一年坊主は帰されるのである。だが、しかし少しばかり社会経験（実は一浪）に勝る私は酩酊することなく先輩から「気に入つた、次ゆこう！」と二次会に出席を許されるのであつた。それだけなら感謝に耐えない先輩の配慮なのだが、ある先輩が一言よけいに「会費が余つたから俺たちだけで飲もう」と云つたものだからたまらない。正義感の塊であつた当時の私は、即座に反応し、身の程もわきまえずに先輩を強く非難したのである。くだんの先輩は自尊心もあつてか無かつてか「表へ出る！」となつた。二、三発は殴られるのかと覚悟したが良識あるもう一人の先輩が中をとりもち、その場の険悪な空気は一応の収束を見た。

しかし面白くないのは私である。せっかく有名な盛り場の柳川町で、しかもきれいな女性が「あらー！この学生さんカワイー！」とまで云つて貰つたのに、ブスツとしたままで終わってしまった。ほろ苦いどころか激苦い最初の思い出となつた。

その後二回は学生寮の「追い出しコンパ」の打ち上げの恒例で、柳川町でお世話になった先輩に報いたものだが、こちらは金の都合でいつも短い時間で終了。あまりご利益は受けなかった。従って大した記憶もない。ただ私が主役の追い出しコンパにも拘わらず、三重県出身の後輩が大いにモテていたのが気に入らなかった。しかし彼は長身でハンサムだったから勝負にはならないと諦めた。ちよつぱり悔しい思い出だ。

最後の思い出はもつと悲惨だ。つまり四年生の時に家庭教師をしていた息子の親父さんが「先生を一度、柳川町へ連れて行ってやるべえ」という訳で、こちらは大盤振る舞いの保証付き、思い切り楽しめる筈だった。しかし親父さんと出かける前に自宅でウイスキーをボトル一本、まるごと飲んでしまつて、へべレケ状態で親父さん行き付けの高級クラブに入ったまでは良かったのだが、その後の記憶が全くなく気がつけば学生寮のベッドの上だった。

翌朝、とにかくお礼を言わなくてはと家庭教師の家を訪ねると、爆笑の渦が待っていた。親父さん曰く、「先生がトイレへ行つて帰つて来(き)ないんで心配で見

に行くのとトイレの個室内のタイルにほつぺを擦り付けて気持ちよさそうに寝ていた」のどとか。武士の情けか、パンツを下ろしていたかどうかは不問に付して下さった。随分綺麗な女性が沢山いたのはかすかに覚えてるものの、誠にもつたいない事となつてしまった。

以上四つの「憧れの柳川町」の思い出だが一つとしてまともな思い出がなかった。いつか社会人になった暁には今度こそはと思いつつ、もう四十五年以上経過して私自身がバーやらクラブそして綺麗な女性に反応しなくなつてしまい、反撃の機会は失われたものと思量される今日この頃だ。我が青春よ、さらば。